

## FCT 25周年記念国際フォーラム・プログラム

2002年8月4日(日) 会場：神奈川県立かながわ女性センター(江ノ島)

### 「メディア・リテラシーと市民のエンパワーメント」

Media Literacy and Empowerment of Citizens

10:00 – 10:30

開会(祝辞: プンジャンテ/返礼のことば:FCT)

Opening: Congratulatory Address by Mr. John Pungent

/Address in Reply by FCT

10:30 – 12:30

メディア・リテラシーワークショップ: ジョン・プンジャンテ氏

「メディア・リテラシーのさらなる展開にむけて: 基本概念と基本的条件」

Media Literacy Workshop Presentation by Mr. John Pungente

“Developing Successful Media Literacy: Key Concepts and Key Factors”

12:30 – 13:30 昼食 Lunch Break

13:30 – 14:30

講演 奥平康弘氏 「メディア社会における表現の自由」

Presentation by Mr. Yasuhiro Okudaira

“The Freedom of Expression in the Media Saturated Society”

14:40 – 16:40

パネル「メディア社会を生きる市民とメディア・リテラシー」

Panel: Media Literacy, How Citizens Foster Its Successful

Development

・「市民の視点にたつジャーナリズム: メディア専門家にできること」

(岩垂弘氏) “Journalism from Citizen’s Perspective: What

Media Professionals Can Do?” by Mr. Hiroshi Iwaware

・「なぜ市民主体のメディア・リテラシーなのか」(鈴木みどり)

“Why Media Literacy Should Be a Grassroots Movement?”

by Midori Suzuki

・パネル・ディスカッション 奥平氏/プンジャンテ氏/岩垂氏/鈴木

Panel Discussion: Pungente/Okudaira/Iwaware/Suzuki

16:40 – 16:50 閉会 Closing

総合司会: 宮崎寿子

17:30 – 19:00 FCT25周年祝賀パーティー

江の島ヨットハウス 2階・海と風のレストラン「テラスカイ」

## F C T市民のメディア・フォーラム創設 25 周年を迎えて ～市民とメディア：グローバルな視点から～

### ○市民と ICT

21 世紀を迎えて「メディア社会」の変容は、その加速度をより一層増しているようである。とりわけ若い世代の日常におけるコミュニケーションのあり方は、携帯電話やブロードバンドに代表されるデジタル・テクノロジーの急激な発達により、大きく変化している。日本では、このような技術は I T、すなわち情報技術と総称され、その経済効果の側面が強調される傾向にあるが、世界では、一般に、I C T と称されている。

I C T = 情報コミュニケーション技術には、単に情報技術を市場に持ち込み、いかに商品化していくかといった問題だけでなく、その技術を使ってどのように人びとのあいだのコミュニケーションを活性化させていくかという重要な問題がある。私たちとしては、この点を確認する必要がある。

日本では新しい技術の発展が e-commerce という経済の活性化にどのように寄与するかについて議論されることはあっても、現在の旧態依然とした政治・行政組織を変革していくために、また開かれた参加型の民主主義社会を構築していくために、この新しいコミュニケーション技術をどう活用すればいいのかといったことが議論されることはほとんどない。インターネット、テレビ、新聞などあらゆるメディアの連携によって、多様な文化、意見をどのように社会に反映させていけばよいかといった方策が、メディア政策の重要な課題として問題提起されることもないのである。

このように日本のメディア政策は、戦後から今日まで一貫して“メディア産業政策”でしかなかった。メディアを文化として捉え、それをどのように社会に位置づけ、活かしていくかを考えることがなかった。そのためにより一層、情報技術だけが強調されるようになってしまっている。それは現在の教育政策にも反映され、“メディア・リテラシー”が“コンピュータ・リテラシー”に置き換えられることによって、単なるスキルの学習が中心になってしまうという弊害も起こっている。

昨年の 9 月 11 日以降、多くの国々で本来の意味で市民社会を「国際化」すること、すなわち共生を基盤とした、多様性を受け入れる社会をつくっていくことの必要性が、広く認識されるようになっていく。

このような状況において、メディア社会に生きる私たちは、インターネットを含むあらゆるメディアの情報に流されることなく、メディアの産業的、政治的、文化的背景を踏まえながら、メディアを主体的に読み解くことを強く求められている。と同時に自らも、アクセスの可能なメディアを使って、身近な周囲からより大きな集団、組織まで、さまざまなレベルで自己の意見を積極的に伝えていくことが求められている。

以上のようにメディアを主体的に読み解き、選択し、自らも積極的に発言していくといった「コミュニケートする力」は、F C T が定義する「メディア・リテラシー」に限りなく近いものである。F C T は 1990 年代以降、このメディア・リテラシーの日本社会におけ

る展開と普及に大きくかかわってきたのである。

### ○コミュニケーションする市民のひろば

FCTは、テレビをはじめとするメディアをめぐる問題について視聴者、研究者、制作者等のメディア関係者がそれぞれの立場を超えて集い、社会を生きる一人ひとりの市民として対等に語り合うことを目的とするひろば（フォーラム）として創設された。すなわち、FCT活動に参加することは、性別、年齢、職業、人種や国籍、社会的地位などにかかわるあらゆるステレオタイプを問い直し、メディアの「意味」を社会的文脈で読み解くことのできる力の獲得をめざすことを意味した。

メディアに関する実証的研究と実践的活動を積み重ねることもまたFCTの当初からの活動であった。メディアを分析して実証的なデータをつくり、それに基づいて社会的に発言していくことは、FCTにとって大きな目的のひとつであった。これまでに多くの報告書を作成し、それに基づいてさまざまな社会的提言を行ってきた。このような「客観的なデータをもとに社会的発言をおこなう」という創設理念は今でもFCT活動の基本理念として生き続けている。FCTは発足当初からメディアに対する主体性の確立をめざし、コミュニケーションする市民のひろばづくりをしてきたのである。

### ○メディア・リテラシー活動の展開へ

FCTの活動は、メディア・リテラシー・ワークショップを含むフォーラム開催、メディア分析調査やメディア報道の検証、メディアに対する提言や申し入れ、市民の権利を確認する憲章の起草などのパブリック・アクセ

ス活動、定期刊行物や分析調査報告書などの刊行、グローバル・ネットワークの構築、など多岐にわたるが、いずれの活動も相互に関連し、広い意味ではすべてがメディア・リテラシーの取り組みの一環をなすものといえる。最近では、グローバルな国際的展開を視野にいれつつ、その活動の中心を、メディア・リテラシーの研修セミナーとそれを軸とした日本各地域における展開に移し、メディア・リテラシーの一層の普及をめざして活動している。

### ○NPOとして

メディアの環境化が進めば進むほど、FCTが創設時に掲げた基本理念の重要性が認識されるようになり、社会的認知も広がってきている。そうした状況のなかで、FCTは1999年に特定非営利活動法人（NPO）の認証を取得し、2002年には、横浜市桜木町のワールドポーターズに2坪足らずの事務所をもつに至っている。NPO法人としての設立趣旨書には、「21世紀に向け、グローバルなネットワーク活動に一層力をいれ、地球市民としてメディア・リテラシー活動により積極的に取り組んでいく」ことが明記されている。

### ○グローバル・ネットワーク

フランスにおける1990年のトゥールーズ会議以降、世界各地でメディア・リテラシーに取り組んでいる人たちのネットワーク活動が拡大していき、FCTも常にその一員としてネットワーク活動に参加してきた。それらの人の多くはFCTと同じようにNPOを組織し、複数のNPOにかかわりながら、それぞれの国や地域でメディア・リテラシーを展開している。

グローバルなネットワーク活動が盛んになるにつれ、メディア・リテラシー教育を主要なテーマのひとつとする国際会議が毎年のように世界各地で開催されるようになり、FCTもそれらの国際会議に招待され、あるいは企画者の一員として参加し報告を行っている。

## ○25周年記念国際フォーラム

以上に述べたように、FCTは、創設当初から国内だけでなく、さまざまな国の人びとと交流し、その交流を活動の中心の一つに据えてきた。FCTが国際会議に出席し報告するといった「内から外」へ向かう流れ、あるいは逆に海外からゲストを招いて国際シンポジウムやフォーラムを開催し、海外の情報を共有するという「外から内」へ向かう流れといった、国内外の相互交流、インターアクションが、FCT活動に与えた影響は計り知れないほど大きい。それは「内」での活動に刺激と創造性をもたらし、「外」においてはFCTの存在を国際的に位置づける重要な役割を果たしている。

この25周年記念フォーラムも、FCTが大きくそのアプローチをメディア・リテラシーへとシフトするきっかけとなった15周年フォーラムのゲスト・スピーカーであるカナダのジョン・ブンジャンテ氏を再び迎えて開催する。ブンジャンテ氏には現在のメディア・リテラシーの実践的な取り組みの紹介、およびメディア・リテラシー活動を成功させ、醸成させていくための条件について話していただく予定である。

## ○なぜ、「表現の自由」なのか

25周年フォーラムのもう一つの重要なテーマは「表現の自由」である。フォーラムでは

メディアと法に関する第一人者である奥平康弘氏を招き、「メディア社会における表現の自由」についてご講演いただく。なお、奥平氏は1977年のFCT創設シンポジウム「子どものテレビの二重の公共性」における主題講演者でもある。

FCTが活動を始めてから四半世紀が経つが、このあいだにメディア報道は大きく変容した。設立当時の70年代後半から80年代にかけては、テレビ報道取材に機動性が増し、レポーターによる現場からの中継が急増し、報道が一層臨場感を増すとともに、ワイド・ショー化していった時期でもあった。ロス疑惑、日航ジャンボ機墜落事故、昭和天皇逝去、湾岸戦争、阪神大震災、松本サリン事件、オウム真理教事件、中学生による一連の殺人事件、そして去年の米国同時多発テロ事件など、その報道のあり方については、さまざまな深刻な社会問題、人権問題が指摘されてきた。

FCTでも、これらの事件や事故が起きる度に、テレビや新聞による集中的な報道を市民の視座から検証し、あるいは分析調査を行い、調査結果を定期的に発行する情報誌「fctGAZETTE」誌上で、また報告書として、社会的に発表してきた。

それらの出版物をいま読み返してみても明らかなように、そうした集中的な報道合戦では、常に「表現の自由」と「人権」の問題を提起する状況が生じている。この事情は今日でも変わらず、ネット社会における国家や企業による個人情報の乱用を防ぐために企図されたはずの「個人情報保護法」が、メディアによる取材をもその中に持ち込むことによって、またもや、「メディアの表現の自由」と「取材される側の人権」の問題になってしまっている。このような状況の中で今一度、メディア・リテラシーの観点から、「表現の自

由」とは誰のための、何のための「表現の自由」なのか、それは私たちの「コミュニケーションする権利」とどうかかわるのかを問いつつ、考えて行きたいとの思いから、この 25 周年フォーラムを企画した。

## ○クロニクル：NPO活動としてのメディア・リテラシーの取り組み

本号の p12 から p17 に、FCT の 1977 年から 2002 年までの 25 年の歩みを「1996 年までの主要な活動」と「最近 5 年間の活動」にわけてまとめた。とくに「最近 5 年間の活動」については、「フォーラム・シンポジウム・ワークショップ」、「メディア分析調査・メディア報道の検証」、「メディアに対する提言・市民の権利憲章の起草など」、「定期刊行物・分析調査報告書・著書の刊行」、「グローバル・ネットワークの構築」に 5 分類して、できるだけ詳細に表を作成した。みなさまとともに FCT の歩みを確認する資料となれば幸いである。

(文責 宮崎寿子／鈴木みどり)

— 『fctGAZETTE』 No.77(2002 年 7 月)掲載 —